

# 「触」と「受」の用法から見る縁起説

——認識論的解釈と輪廻的解釈をめぐって——

唐 井 隆 徳

## 1. はじめに

各支縁起説の支分の意味を考察する際には、その縁起支となる語が示す意味の可能性をできる限り挙げる必要がある。縁起支研究では、一義的な解釈をもたらすことを目的とするのではなく、初期仏典に種々の縁起説が説かれている限り、それぞれに適した縁起支理解がなされるべきである。例えば、五支縁起説に見られる渴望 (*taṇhā*) は苦の根本原因としての役割を担っており、さらにその原因を辿ることはない。一方、十二支縁起説に見られる渴望は様々な縁起支に条件付けられており、苦の根本原因と見做されていない。同じ渴望という縁起支ではあるが、それぞれの縁起説に応じて意味や役割が異なっていることが窺える。同様のことは、本稿で主に扱う触 (*phassa*) や受 (*vedanā*) に関しても当てはまるはずである。

従来、「識→名色→六処→触→受」の縁起関係をめぐって、水野 [1984: pp. 119-131]、Bucknell [1999] は、識・名色・六処の縁起関係を根・境・識の集合と関連させて認識論的に理解し、業報輪廻の思想を用いて説明するのは後の解釈によるものと考えた<sup>1)</sup>。その一方で、初期仏典中に輪廻的・胎生学的に解釈する根拠が見られること<sup>2)</sup>や、三世にわたる十二支縁起説が説かれていること<sup>3)</sup>も報告されている。これら両解釈が起こるのは、識と名色の理解の仕方に

1) Reat [1987] を参照。

2) Aramaki [1985]、仲宗根 [2003] を参照。

3) 名和 [2015] を参照。

関係するため、両語についての研究が盛んになされているが、間接的であっても触と受の研究はそれに資すると思われる。そこで、本稿では、パーリ語で伝承される初期仏典を中心に、触と受の用法を考察し、その用法に基づいて種々の縁起説を見ていく。さらに、解釈が割れる十支縁起説の理解についても考察を試みる。

## 2. 認識過程における触と受

縁起説における触と受は、六つの感官の機能に基づいた認識過程の要素と理解されるのが一般的である。しかし、初期仏典に先行すると考えられる *Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad* 3. 2. 9には、「皮膚によって、諸々の接触を感受するからである」<sup>4)</sup>とあり、皮膚による触と受が確認できる。これより前に、呼吸・言語・舌・眼・耳・意・両手にも言及しているが、そこに触と受は見られない。そのため、この場合の触と受は様々な感官の機能に基づくものではなく、皮膚という特殊な事例にのみ用いられていることが分かる。また、古層のジャイナ教聖典にも、触を対象とする皮膚<sup>5)</sup>や身体<sup>6)</sup>の用例が見られる。初期仏典においても、最古と言われる *Suttanipāta* の第四章 *Aṭṭhakavagga* には「色・声・味・香・触 (phassa)」と列挙する箇所<sup>7)</sup>があり、触は五つの対象のうちの一つを表しているに過ぎない。ただし、パーリ聖典で身体 (kāya) の対象とされるのは「触れることができるもの (phoṭṭhabba)」であり、触 (phassa) との使い分けがなされている。縁起支としての触が、触覚の対象という特殊な事例を想定しているとは考えにくいいため、ここではそれ以外の触と受の用法を確認する。

4) Olivelle [1998: pp. 80-81] を参照。

5) *Isi* 29. 11-12 (p. 532).

6) *Utt* 32. 74-75 (p. 231).

7) *Sn* 974.

## 2.1. 抑止されない触と受

縁起説は苦の出現と抑止を連鎖的に説くものであるため、その支分となる触と受の出現と抑止も必然的に説かれることになる。しかし、経験的に考えても分かるように、生きている限り触と受を完全に抑止することはできず、それを示唆する用法も資料から読み取ることができる。Sn 966には「〔乞食修行者は〕病気にかかること (ātaṃka-phassa<sup>8)</sup>) や飢えに襲われたとしても (phutṭho)、寒さや過度な暑さに耐えなければならない (adhivāsayeyya)」<sup>9)</sup>とあり、出家修行者は何かとかかわることがあっても、耐えることが求められる。ここでの「耐える」という表現は adhi-√vas の使役形であることから「〔自らに何かを〕定住させる」という意味であり、対象を受け入れることを表している。つまり、触自体を抑止するのではなく、触があっても耐え、動揺してはいけないということを説いているのである。以上のような特徴を持つ触は他にも見られる。例えば、「世間における諸々の物事に触れたとしても (phutṭha)、心は揺れ動かない」<sup>10)</sup>、「楽しいことや苦しいことに触れたとしても (phutṭha)、賢者たちは様々な〔心の状態〕を示さない」<sup>11)</sup>、「荒野にある広大な林において、虻や蚊に襲われたとしても (phutṭha)、戦いの先頭で象が〔耐える〕ように、自覚した状態で、そこで耐えなければならない (adhivāsaye)」<sup>12)</sup>、「思慮深い者は、体験に触れたとしても (phassaphutṭha) 動揺しない」<sup>13)</sup>などがある。受についても、「感受 (vedanā) に耐えた (ajjhāvāsaya)」<sup>14)</sup>、「熱望を離れた心で感受す

8) これ以降、「触」を訳す時には、それぞれの文脈に応じた訳語を与える。

9) 類似の用法は古層のジャイナ教聖典にも見出される。例えば、Āy I. 6. 5 (p. 31), Āy I. 8. 2 (p. 34) には、「勇敢な者は襲われたとしても (putṭha)、それらの襲いかかる〔苦難〕 (phāsa) に耐えなければならない (ahiyāsa)」という表現が見られ、襲いかかる〔苦難〕 (phāsa) としては、草、寒さ、熱、虻や蚊などが挙げられている。ただし、谷川 [1980] によれば、ジャイナ教の場合は主に肉体的な苦痛を意味する語として触を用いていた。このような触の用法に関する仏典とジャイナ教聖典の平行関係については、Dixit [1978: pp. 87-88]、谷川 [1980]、山崎 [2018: pp. 595-596] を参照。

10) Sn 268.

11) Dh. 83.

12) Th 31, 244, 684.

13) Th 783, MN 82 (Vol. II, p. 73).

14) Th 906, SN 6. 2. 5 (Vol. I, p. 159).

る (vedeti)。そして、それに固執して留まらない<sup>15)</sup>、「また、かの尊者ゴータマは、確かに味を感受して (paṭisaṃvedin) 食べ物を摂取するが、味への熱望を感受して〔食べ物を摂取するのでは〕ない<sup>16)</sup> などにあるように、触と同様、受があってもそれにとらわれないことを説いている。初期仏典には、縁起説に見られるような触と受の抑止が説かれる一方、このような用法も見られ、これが縁起説の成立とどのように関連するのかを確認する必要がある。

## 2.2. 触と受を合わせて説く用例

*Suttanipāta* の第四章には、「接触 (phassa) を因として、快 (sāta) や不快 (asāta) がある<sup>17)</sup> とあり、「触→受」の縁起関係の素材とも見做せる。しかし、韻文資料には、散文資料に見られるような触と受が関連している用例はほとんど確認されない。そこで、ここでは散文資料を中心に、触と受を合わせて説く用例を確認する。

縁起説と関連する触と受の主な用法は次の二種類である。まず、①「眼と諸々の形態に縁って、眼による識別作用が生起する。三つの集合が接触 (phassa) である。接触を縁とすることにより、感受 (vedanā) が〔生じる〕。…<sup>18)</sup> とあるように、根・境・識の集合 (触) とそれに基づく受を説く用例がある。次に、②「乞食修行者たちよ、眼という要素 (cakkhudhātu) に縁って、眼による接触 (cakkhusamphassa) が生起する。眼による接触到縁って、眼による接触から生じる感受 (cakkhusamphassajā vedanā) が生起する<sup>19)</sup>、「乞食修行者たちよ、まさにこのように、眼が存在している時、眼による接触 (cakkhusamphassa) を縁とすることにより、自己〔の内〕に楽、苦が生起する<sup>20)</sup> とあるように、縁起説に見られる「六処→触→受」の縁起関係に類似する用例がある。この二つの用法は縁起説とは関係のない文脈で用いられており、これらを基に縁起説が構

15) Th 806.

16) MN 91 (Vol. II, p. 138).

17) Sn 870.

18) MN 18 (Vol. I, pp. 111-112).

19) SN 14. 4 (Vol. II, p. 142).

20) SN 35. 195 (Vol. IV, p. 171).

築された可能性もある。

さて、ここで問題となるのは①と②の関係である。本稿の冒頭でも述べたように、従来の研究の中には、根を六処、境を名色と見做すことで、①の関係と「識→名色→六処→触→受」の縁起関係が同じ内容を表していると主張するものも見られる。しかし、この主張に問題がないわけではない。例えば、①で見たように、識は根と境によって生起するものであるから、「識→名色→六処」の縁起関係とは順序が逆であり、これは大きな相違点である。また、①の関係はむしろ②の関係に対応している可能性もある。なぜなら、「六処→触→受」の縁起関係に、境と識に相当する語は確かに見られないが、②で確認したように「眼による接触 (cakkhusamphassa)」とあるため、そこには少なくとも感官の対象が想定されるからである。それに関連して、根・境・識の集合を -samphassa と呼ぶ資料<sup>21)</sup>もあり、②に見られる -samphassa にも三つの集合が意図されていた可能性もある<sup>22)</sup>。

### 2.3. 業報輪廻と関連する触と受

これまで確認してきたように、触と受が認識過程の要素を担っていることに異論はない。しかし、ただ認識過程を表すのではなく、触と受が業の果報や輪廻説と関連する場合もある<sup>23)</sup>。触の用例はそれ程多くないが、「私は悪しき業を

21) SN 35. 93 (Vol. IV, pp. 67-69). Cf. MN 148 (Vol. III, pp. 280-287).

22) SN 35. 130 (Vol. IV, p. 115. 10-16)

katham nu kho bhante dhātunānattam paṭicca uppajjati phassanānattam, phassanānattam paṭicca uppajjati vedanānānattan ti.

idha gahapati bhikkhu cakkhunā rūpaṃ disvā manāpam itthetan ti pajānāti. cakkhuvīññāṇaṃ sukhavedanīyaṇ ca phassaṃ paṭicca<sup>1)</sup> uppajjati sukhā vedanā. …

大徳よ、「要素の種々に縁って、接触の種々性が生起し、接触の種々に縁って、感受の種々性が生起する」というのは、いったい全体、どのようなことであるのか。家主よ、ここで、乞食修行者が眼によって形態を見て、意に適うものを「そのようにこれがある」と理解する。眼による識別作用があり、楽を感受することになる接触到縁って、楽なる感受が生起する。…

1) 下線部については、Bodhi [2000: p. 1417, n. 127] に倣った。

この資料に対応する漢訳資料は見当たらないが、「六処→触→受」の縁起関係に境と識が含意されていることを示す用例である。

なしていないのに、どうして苦が触れるだろうか (phusissati)<sup>24)</sup>、「新しい業をなさず、古い業〔の果報〕にくり返し触れ (phussa phussa)、〔業を〕減ぼす」<sup>25)</sup>などが見られる。一方、受についても、「以前に、私は、諸々の他の生まれにおいて悪しきことをなしたが、その〔果報は〕この世のみで感受することになる (vedaniya)<sup>26)</sup>、「悪しき業の者たちが、諸々の悪しき業の果報を感受する (paṭisaṃvedenti)<sup>27)</sup>、「彼は、その時〔地獄で〕苦しく、強く、鋭い諸々の感受を受ける (vedanā vedeti) が、その悪しき業が減びない限り、〔彼は〕死なない」<sup>28)</sup>、「彼はこの業の果報によって…地獄で苦しめられ、その業の果報の残りによって、このような自己の状態の獲得を感受する (paṭisaṃvediyati)<sup>29)</sup>などが見られる。

また、次に取り上げる MN 57<sup>30)</sup>には、牛のように振る舞う修行をするプンナがその修行を捨てることができるように、ブッダが四種類の業（黒、白、黒白、非黒非白）について説く場面があり、ここでは黒い業を説明する箇所を引用する。

MN 57<sup>31)</sup> (Vol. I, pp. 389. 27–390. 3)

katamañ ca Puṇṇa kammaṃ kaṇhaṃ kaṇhavipākaṃ: idha Puṇṇa ekacco sabyābajjhaṃ kāyasaṅkhāraṃ abhisaṅkharoti sabyābajjhaṃ vacīsaṅkhāraṃ abhisaṅkharoti sabyābajjhaṃ manosāṅkhāraṃ abhisaṅkharoti. so sabyābajjhaṃ kāyasaṅkhāraṃ abhisaṅkharitvā sabyābajjhaṃ vacīsaṅkhāraṃ abhisaṅkharitvā sabyābajjhaṃ manosāṅkhāraṃ abhisaṅkharitvā sabyābajjhaṃ lokam upapajjati.

23) 詳細については、拙稿（唐井 [2020]）を参照。

24) AN 3. 65 (Vol. I, p. 192).

25) AN 3. 74 (Vol. I, p. 221), AN 4. 195 (Vol. II, pp. 197–198).

26) Th 81.

27) MN 83 (Vol. II, p. 80).

28) MN 129 (Vol. III, p. 166), MN 130 (Vol. III, p. 183).

29) SN 19 (Vol. II, pp. 254–262).

30) 赤沼 [1958]によると、これに対応する漢訳阿含経はないが、『阿毘達磨集異門足論』（T26, 396）には対応する箇所が確認される。Anālayo [2011: pp. 333–334]、本庄 [2014: pp. 419–421] を参照。

31) AN 3. 23 (Vol. I, pp. 122–123), AN 4. 23 (Vol. II, pp. 230–232) を参照。

tam enaṃ sabyābajjhaṃ lokaṃ upapannaṃ samānaṃ sabyābajjhā phassā phusanti.  
so sabyābajjhehi phassehi phutṭho samāno sabyābajjhaṃ vedanaṃ vedeti  
ekantadukkhaṃ seyyathā pi sattā nerayikā. iti kho Puṇṇa bhūtā bhūtassa upapatti  
hoti, yaṃ karoti tena upapajjati, upapannaṃ enaṃ phassā phusanti. evaṃ p' ahaṃ  
Puṇṇa: kammaḍāyādā sattā ti vadāmi.

また、ブンナよ、黒い果報がある黒い業とは何か。ブンナよ、この世である者が、苦痛を伴う身体に関する形成作用 (saṅkhāra) をなす。苦痛を伴う言葉に関する形成作用をなす。苦痛を伴う意に関する形成作用をなす。彼は、苦痛を伴う身体に関する形成作用をなし、苦痛を伴う言葉に関する形成作用をなし、苦痛を伴う意に関する形成作用をなし、苦痛を伴う世界に再生する。その彼が、苦痛を伴う世界に再生している時、苦痛を伴う諸々の体験が〔彼に〕触れる (phassā phusanti)。彼が、苦痛を伴う諸々の体験に触れて (phassehi phutṭho) いる時、苦痛を伴う専ら苦しむ感受を受ける (vedanaṃ vedeti)。たとえば、地獄の生き物たちのようなものである。ブンナよ、このように、確かに存在から存在への再生が生じる。なすことによって再生し、再生したその者に、諸々の体験が触れる (phassā phusanti)。ブンナよ、私は次のようにも言う。「生き物たちは業の相続者である」と。

ここでは、触と受が業報輪廻と関わるだけではなく、縁起支である行 (saṅkhāra) も合わせて説かれており、「行→再生→触→受」という関係が確認できる。

このような触と受の用法に関連して、SN 35. 145には「眼は古い業であり、形成され、意志されたものであり、感受されることになるものと見なければならぬ<sup>32)</sup>とある。ここでは、六つの感官の機能を業の果報と見做している<sup>33)</sup>。これと同類の用例を以下に示す。

32) SN 35. 145 (Vol. IV, p. 132).

33) この表現については、舟橋 [1972] [1974]、藤田 [1979: pp. 131-144] を参照。

SN 12. 37 (Vol. II, pp. 64–65)

nāyam bhikkhave kāyo tumhākam na pi aññesaṃ. purāṇaṃ idam bhikkhave  
kammam abhisaṅkhatam abhisañcetaṃ vedaniyaṃ datṭhabbaṃ.

乞食修行者たちよ、この身体はあなたたちのものではなく、他の者たちのものでもない。乞食修行者たちよ、この古い業は、形成され、意志されたものであり、感受されることになるものと見なければならぬ。

ここでは身体が業の果報として扱われている。これに対応する梵文資料には、「…この身体はあなたたちのものではなく、他の者たちのものでもない。この六つの接触のための拠り所（六触処：ṣaḍ imāni sparśāyatanāni）は、以前に形成され、意志されたものであり、古い業であると知らなければならぬ…」<sup>34)</sup>とある。ここでの六触処は文脈から考えて、身体の構成要素と見做すのが妥当である<sup>35)</sup>。このように、業の果報を表す感官の機能の用例では、認識過程の一部ということよりも、身体の構成要素ということに関心が向けられていると言える。パーリ聖典にも、「六つの接触のための拠り所を持つ身体（chaphassāyatanī kāyo）」<sup>36)</sup>、「…この人は、六つの要素を有し、六つの接触のための拠り所を有し、…」<sup>37)</sup>、「しかし、この不安のみが、すなわち、六つの拠り所を有するまさにこの身体に縁って（imam eva kāyaṃ paṭicca saḷāyatanikaṃ）、生命を縁とすることにより、まさに存在する」<sup>38)</sup>が見られる。

このような六処の用法も合わせて考慮すれば、「六処→触→受」の縁起関係は、分析的な認識過程と見做せるだけでなく、輪廻の生存における業の果報とも見做せることになる。

34) NidSa(Ch/F) 13. 1 (p. 144). SĀc(1) 295(T02, 84) を参照。

35) Aramaki [1985: p. 105] を参照。

36) Th 755.

37) MN 140 (Vol. III, p. 239).

38) MN 121 (Vol. III, pp. 107–108).

### 3. 触と受を含む縁起説

縁起説の成立に関して屢々指摘されているように、十二支縁起説を含む種々の縁起説は、五支縁起説（愛→取→有→生→老死）を軸に構築されたと考えるのが自然である。その結合部分である「感受→渴望 (taṇhā)」の縁起関係は、縁起説の用例を除けば初期仏典中には確認されないことから、縁起説の成立過程で現れた特殊な因果関係<sup>39)</sup>であると言える。そのため、渴望を越えてさらに原因を辿ろうとする背景には何らかの目的があったはずであり、ここでは触と受を含む縁起説の用例を確認しながら、その目的についても可能な限り考える。

#### 3.1. 根・境・識の集合を起点とする縁起説

先述した根・境・識の集合と縁起説が結びついた用例が見られる<sup>40)</sup>が、ここではそれらのうちの一つを示す。

SN 35. 107 (Vol. IV, p. 87. 13-33)

cakkhuṃ ca paṭicca rūpe ca uppajjati cakkhuvīññāṇaṃ, tiṇṇaṃ saṅgati phasso, phassapaccayā vedanā, vedanāpaccayā taṇhā, taṇhāpaccayā upādānaṃ, upādānapaccayā bhavo, bhavapaccayā jāti, jātipaccayā jarāmaṇaṃ sokaparideva-dukkhadomanassupāyāsā sambhavanti, ayam lokassa samudayo, …

cakkhuṃ ca paṭicca rūpe ca uppajjati cakkhuvīññāṇaṃ, tiṇṇaṃ saṅgati phasso, phassapaccayā vedanā, vedanāpaccayā taṇhā, tassāyeva taṇhāya asesavirāganirodhā upādānanirodho, pe. evam etassa kevalassa dukkhakkhandhassa nirodho hoti. ayaṃ kho bhikkhave lokassa atthagamo ti.

39) SN 36. 23-25 (Vol. IV, pp. 232-234) には、「渴望は、感受の出現に至る道である (taṇhā vedanāsamudayagaminī paṭipadā)」とあり、「受→愛」の縁起関係とは逆の関係が説かれていることから、特殊であることが分かる。

40) SN 12. 43 (Vol. II, pp. 71-73), SN 35. 106 (Vol. IV, pp. 86-87), SN 12. 44-45 (Vol. II, pp. 73-75), SN 35. 107 (Vol. IV, p. 87), SN 35. 113 (Vol. IV, pp. 90-91).

眼と諸々の形態に縁って、眼による識別作用が生起する。三つの集合が接触である。接触を縁とすることにより、感受が〔生じる〕。感受を縁とすることにより、渴望が〔生じる〕。渴望を縁とすることにより、執着が〔生じる〕。執着を縁とすることにより、生存が〔生じる〕。生存を縁とすることにより、生まれが〔生じる〕。生まれを縁とすることにより、老いと死、憂い・嘆き・苦しみ・落胆・悩みが生じる。これが世間の出現である。…

眼と諸々の形態に縁って、眼による識別作用が生起する。三つの集合が接触である。接触を縁とすることにより、感受が〔生じる〕。感受を縁とすることにより、渴望が〔生じる〕。まさにその渴望が残りなく褪せて抑止されることにより、執着の抑止が〔生じる〕。執着の抑止により、生存の抑止が〔生じる〕。…このようにこの苦の集まり全体には抑止が生じる。乞食修行者たちよ、確かにこれが世間の没滅である。

まず、下線部にあるように、苦が出現する場合であれ、抑止される場合であれ、渴望が生じるところまでは同じである。そのため、縁起説としては、渴望する主体のあり方を詳述した五支縁起説とも呼べる用例である。これは先に見たように、触と受自体が抑止されるのではなく、それに対して心が揺れ動かないようにするという内容を縁起説に反映した結果であると思われる。一方、対応する漢訳資料<sup>41)</sup>には、触と受の抑止も説かれており、縁起説の形式に合わせていると推察される<sup>42)</sup>。さらに、この用例以外にも、触と受を含む縁起関係を示しながらも抑止を説かない事例が確認される。例えば、SN 12. 32に見られる縁起関係は、生まれから原因を辿っていき、渴望が感受を原因とするところまで進む。その後、「…確かにこれら三つの感受は常住ではない。常住ではないものは苦であると知られた時、諸々の感受に対する喜び (nandi) は留まらなかった」<sup>43)</sup>とあり、感受の抑止を説くのではなく、感受を正しく知り、それ

41) SĀc(1) 68 (T02, 18), SĀc(1) 218 (T02, 54-55), SĀc(1) 228 (T02, 55-56).

42) 宮本 [1974: p. 57] を参照。

に対して喜ばないことを説く。また、DN 1には、「その全ての者たちは、六つの接触のための抛り所によって、くり返し触れてから感受する。感受を縁とすることにより、渴望が〔生じる〕。…」<sup>44)</sup>という縁起関係が見られ、その直後に、六触処の出現や没滅などがあるがままに理解するとある。つまり、ここでも抑止ではなく、六触処の正しい理解を説いている。認識に関する語は、五支縁起説を構成する支分とは異なり、それ自体が悪しきものというわけではない。問題となるのは、それを誤って理解したり、それにとらわれることであるため、このように認識に関する語を分析的に説くだけで、その抑止については説かれないのである<sup>45)</sup>。一方、次に考察する八支縁起説は認識に関する語の抑止も説いており、基本的な縁起説の形式により近づいた形になっている。

### 3.2. 八支縁起説

ここでは、「六処→触→受」の縁起関係が五支縁起説と結びついた八支縁起説の用例を見ていく。SN 12. 24 (Vol. II, pp. 32-37) では、異教の遍歴行者たちが、業論者たちの苦に関する見解をサーリプッタに述べる。それに対して、サーリプッタは、苦が縁って生起しているもの (paṭiccasamuppanna) であり、接触 (phassa) を原因としていることを告げる。引き続き、「その沙門やバラモンたちは、業論者として、苦を自ら作ったものであると知らせるが、そのことも接触を縁とすることにより〔生じる〕。…その沙門やバラモンたちは、業論者として、苦を自ら作ったものであると知らせるが、実にその者たちが接触を除いて感受することになる (paṭisaṃvedissanti) という、この道理は見出されない」<sup>46)</sup>と説明する。ここでの触は単なる体験というだけではなく、自らの見解を主張する契機として、限定的な意味でも用いられている。さらに、ブツダが以上の内容について同意した後、アーナンダが老死から順に原因を辿って

43) SN 12. 32 (Vol. II, p. 53).

44) DN 1 (Vol. I, p. 45).

45) MN 38 (Vol. I, pp. 265-270) には、胎生学的な縁起説が説かれる。しかし、苦の抑止を説く場面では、認識に関する語の抑止ではなく、感受を歡喜しないことが説かれている。

46) SN 12. 24 (Vol. II, pp. 33-34).

いき、以下のように述べる。

SN 12. 24 (Vol. II, p. 37. 19–23)

evam puṭṭhāhaṃ bhante evaṃ vyākareyyaṃ, phasso kho āvuso saḷāyatanaṇidāno saḷāyatanaśamudayo saḷāyatanaajātiko saḷāyatanaśabhavo ti, channaṃ tveva āvuso phassaḷāyatanaṇaṃ asesavirāgaṇirodhā phassaṇirodho, …

大徳よ、このように問われた私は、次のように解説するだろう。「友よ、確かに、接触は六つの拠り所を因とし、六つの拠り所から出現し、六つの拠り所に由来し、六つの拠り所から現れる」と。「友よ、一方、六つの接触のための拠り所が残りなく褪せて抑止されることにより、接触の抑止が〔生じる〕。…」

「六処→触→受」の縁起関係は認識過程を表しているが、文脈から考えれば、触は見解の主張を引き起こす要因でもある。そのため、この八支縁起説は論争する者たちへの批判にも関心を向けていると言えるだろう<sup>47)</sup>。次に引用する資料にも八支縁起説が説かれるが、意味内容は異なる。

SN 12. 12 (Vol. II, pp. 13. 14–14. 23)

viññāṇāhāro<sup>48)</sup> āyatitaṃ punabbhavābhiniśbattiyā paścayo, tasmaṃ bhūte śati saḷāyatanaṃ saḷāyatanaśaccayā phasso ti. …

channaṃ tveva Phaggaṇa phassaḷāyatanaṇaṃ asesavirāgaṇirodhā phassaṇirodho, …  
evaṃ etassa kevalassa dukkhakkhandhassa ṇirodho hoti ti.

識別作用という摂取物は、将来に再度の生存へ転生することの縁である。  
その生じたものが存在している時、六つの拠り所が〔生じる〕。六つの拠り所を縁とすることにより、接触が〔生じる〕。…

パグナよ、一方、六つの接触のための拠り所が残りなく褪せて抑止され

47) この資料に対応する漢訳資料は見られないが、同じ内容を説くものとして DĀc 17 (T01, 76)がある。

48) PTS 版には viññāṇāhāro とあるが、このように訂正する。

ることにより、接触の抑止が〔生じる〕。…このようにこの苦の集まり全体には抑止が生じる。

この縁起説も、「六処→触→受」の縁起関係を起点とする八支縁起説であり、下線部を除けば、SN 12. 24の八支縁起説と類似している。ただし、下線部の表現があることから、輪廻の生存を意識した縁起関係となっている。

これら二種類の縁起説は同じ八支縁起説ではあるが、内容は異なっている。先述したように、「六処→触→受」の縁起関係を、分析的な認識過程とも、輪廻の生存における業の果報とも見做せることを考慮すれば、このような二種類の八支縁起説が存在することにも納得がいく。以上のことから、同じ縁起説であっても、用いられる文脈に応じて、縁起支の役割や縁起説自体の意味が異なる可能性があることに留意しなければならない。

#### 4. 十支縁起説について

ここまで、触と受を含む縁起説を確認したが、最後に十支縁起説を取り上げる。先行研究<sup>49)</sup>によると、「識→名色→六処→触→受」の縁起関係は、根・境・識の集合に見られる認識論的な因果関係と同じものであり、業報輪廻の思想を用いて解釈することは、後のものと見做す傾向があった。しかし、本稿で指摘したように、「六処→触→受」の縁起関係自体が、認識過程を六つに分類したものとも、輪廻の生存における業の果報とも解釈でき、さらに八支縁起説についても、苦が出現する場合のみであるが輪廻的に解釈可能な用例も見られた。そのため、触と受の用法から考えても、「識→名色→六処→触→受」の縁起関係は、認識過程を想定したものではなく、元々輪廻の生存を意識して構築された可能性もある。また、この両解釈が起こるのは、名色を境と同義であるとして認識対象と見るのか、輪廻の主体と見るのかという名色の解釈によると

49) 藤田 [1978: pp. 111-112]、水野 [1984: pp. 119-131]、Reat [1987]、Bucknell [1999] を参照。

ころが大きい。ただし、名色は外界の対象とも輪廻の主体とも見做せるため、名色の用法から考えても両解釈が成立する。つまり、各縁起支の用法上、十支縁起説は認識論的にも輪廻的にも解釈可能ということになる。

このように、十支縁起説に対する両解釈が可能であることを認めた上で、本稿では、「識→名色→六処→触→受」の縁起関係が輪廻的に理解されていた可能性の方が高いことを、以下の視点から指摘したい。

#### 4.1. 十支縁起説に類似する用例

ここでは、十支縁起説に類似する縁起説を確認することで、「識→名色→六処→触→受」の縁起関係がどのように理解されていたのかを考察する。先述した SN 12. 12に見られる八支縁起説には、「識別作用という摂取物は、将来に再度の生存へ転生することの縁である。その生じたものが存在している時、六つの拠り所が〔生じる〕」と説かれていた。註釈で「その生じたもの」が名色と理解されている<sup>50)</sup>ように、SN 12. 12にある八支縁起説には「識→名色→六処→触→受」の縁起関係と類似した箇所があり、それが再生の過程を表していることを既に確認した。また、次に示す資料も十支縁起説に類似している。

SN 12. 39 (Vol. II, p. 66. 9-18)

yañ ca bhikkhave ceteti yañ ca pakappeti yañ ca anuseti, ārammaṇam etaṃ hoti viññāṇassa ṭhitiyā, ārammaṇe sati patiṭṭhā viññāṇassa hoti, tasmim̐ patiṭṭhite viññāṇe virūlḥe nāmarūpassa avakkanti hoti. nāmarūpapaccayā saḷāyatanam. saḷāyatanapaccayā phasso. phassapaccayā vedanā, … sokaparidevadukkha-domanassupāyāsā sambhavanti. …

乞食修行者たちよ、〔人が〕意志し、企図し、依りかかる、その対象は、識別作用の安住のためになる。対象が存在している時、識別作用の安住が生じる。その識別作用が安住し、成長した時、名称と形態の降下が生じる。名称と形態を縁とすることにより、六つの拠り所が〔生じる〕。六つの拠

50) SN-a 12. 12 (Vol. II, p. 31).

り所を縁とすることにより、接触が〔生じる〕。接触を縁とすることにより、感受が〔生じる〕。…憂い・嘆き・苦しみ・落胆・悩みが生じる。…

この前経（SN 12. 38）でも下線部と同じ表現が見られる。そこには「…その識別作用が安住し、成長した時、将来に再度の生存へ転生すること（*āyatim punabbhavābhiniḅatti*）が生じる。…」<sup>51)</sup>とあり、SN 12. 12の八支縁起説にある「識別作用という摂取物は、将来に再度の生存へ転生することの縁である」という関係に類似している。上に引用したSN 12. 39では、下線部に続いて *nāmarūpassa avakkanti* が見られるが、名色が難解な語であるため、意味は明確ではない<sup>52)</sup>。次に示す資料は、縁起説として完全なものではないが、識と名色の関係が見られるので確認する。

AN 3. 61 (Vol. I, p. 176. 30-33)

*channaṃ bhikkhave dhātūnaṃ upādāya gabbhassāvakkanti hoti okkantiyā sati nāmarūpaṃ, nāmarūpapaccayā saḷāyatanam, saḷāyatanapaccayā phasso, phassapaccayā vedanā.*

乞食修行者たちよ、〔識別作用を含む〕六つの要素に基づいて、胎児の入胎が生じる<sup>53)</sup>。入胎が存在している時、名称と形態が〔生じる〕。名称と形態を縁とすることにより、六つの拠り所が〔生じる〕。六つの拠り所を縁とすることにより、接触が〔生じる〕。接触を縁とすることにより、感受が〔生じる〕。

ここに見られる識と名色の関係も認識論的なものではなく、再生の過程として理解されているのは明らかである。また、九支縁起説を説く DN 15 (Vol. II, pp. 62-63) に見られる識と名色の関係も輪廻的・胎生学的に理解されている。

51) SN 12. 38 (Vol. II, p. 65).

52) *nāmarūpassa avakkanti* の理解については、名和 [2018] を参照。

53) この部分に関する註釈 AN-a 3. 61 (Vol. II, p. 281) が引用する MN 38 (Vol. I, pp. 265-270) にも、胎生学的な縁起説が説かれているが、識や名色という語は現れない。

以上のことから、縁起説における識と名色を輪廻的に解釈する用例は見出せるが、認識過程における主体と客体の関係で理解する明確な用例は確認できない。

#### 4.2. SN 12. 19に見られる名色

先に、識と名色を認識の主体と客体として理解できる縁起説の用例は確認できないと述べたが、SN 12. 19における名色は認識対象と見做し得るものであり、頻繁に言及される<sup>54)</sup>ため、ここでも取り上げる。

SN 12. 19 (Vol. II, pp. 23. 35-24. 4)

avijjānīvaraṇassa bhikkhave bālassa taṇhāya sampayuttassa evaṃ ayaṃ kāyo samudāgato, iti ayaṃ ceva kāyo bahiddhā ca nāmarūpam, itthetaṃ dvayaṃ dvayaṃ paṭicca phasso saḥevāyatanāni, yehi phutṭho bālo sukhadukkhāni paṭisaṃvediyati, etesaṃ vā aññātarena.

乞食修行者たちよ、無知という覆いがあり、渴望に繋がれている愚か者には、このように、この身体が起こっている。このように、この身体と外に名称と形態があり、したがって、この二つがある。二つに縁って接触が〔生じる〕。それら（六つの拠り所）によって、あるいは、これら（六つの拠り所）のうちの一つによって触れられた愚か者が楽と苦を感受するよ  
うな、まさに六つの拠り所がある。

下線部にあるように、この資料では、名色を外界の対象として扱っている。さらに、無明・愛・六処・触・受の縁起支も、一般的な縁起説の順序とは異なるが確認できる。この下線部のパラレルを見ると、savijñānakaḥ kāyo bahirdhā ca nāmarūpam<sup>55)</sup>、「身内有此識。身外有名色」<sup>56)</sup>とあり、パーリ聖典に「身体(kāya)」とある部分を「識別作用を伴う身体」と理解していることになる。

54) Aramaki [1985: pp. 98-103]、Schmithausen [2000: pp. 67-70]、Olalde [2014: pp. 112-117] を参照。

55) NidSa(Ch/F) 12. 1 (p.140).

56) SĀc(1) 294 (T02, 83).

このことは、SN 12. 19の註釈で「この身体とは、識別作用を伴う (saviññāṇaka) この自己の身体である」<sup>57)</sup>と説明されていることに対応する<sup>58)</sup>。パーリ聖典にも「識別作用を伴う身体」という表現があるため、いずれが原型に近いのか定かではない。しかし、通常この表現は、「この識別作用を伴う身体と、外にある全ての特徴について (imasmim ca saviññāṇake kāye bahiddhā ca sabbanimittesu)」<sup>59)</sup>とあり、SN 12. 19の平行にある説き方は稀と言える。いずれにせよ、識に縁って名色が生じると説かれているわけではなく、識と名色の関係性は不明瞭である。ただし、このSN 12. 19やその平行に見られるような複雑な認識過程を直線的な因果関係に当てはめて、「識→名色→六処→触→受」の縁起関係が成立した可能性があることにも留意しておく必要はあるだろう。

さて、ここで名色を認識対象と見做すことに関して、識と名色の相互依存関係についても言及しておく。十支縁起説の中には、識と名色の相互依存関係を説くもの<sup>60)</sup>も見られるが、その正確な意味は把握し難い。その中で、「識→名色→六処→触→受」の縁起関係を認識論的に解釈する先行研究の中には、相互依存関係にある名色を識の対象と見做すものもある<sup>61)</sup>。しかし、既に指摘されている<sup>62)</sup>ように、初期仏典には、認識の主体と客体を表す相互依存は説かれていない。そのため、識と名色の相互依存関係を認識論的に解釈可能であることを論証するのは難しい。その一方で、DN 15 (Vol. II, pp. 62-64)に見られる識と名色の相互依存関係は、輪廻的・胎生学的に解釈されている。それでは、識と名色以外にどのような相互依存関係があるのかというと、「喜び (nandi) の消滅により、熱望 (rāga) の消滅がある。熱望の消滅により、喜びの消滅があ

57) SN-a 12. 19 (Vol. II, p. 38).

58) このような対応関係については、馬場 [2003] を参照。

59) MN 109 (Vol. III, p. 18), MN 112 (Vol. III, p. 32), SN 18. 21 (Vol. II, p. 252), SN 22. 72 (Vol. III, p. 80), SN 22. 82 (Vol. III, p. 103), SN 22. 91 (Vol. III, p. 136), SN 22. 92 (Vol. III, p. 137), SN 22. 124 (Vol. III, p. 169), SN 22. 125 (Vol. III, p. 170), AN 3. 32 (Vol. I, p. 132).

60) SN 12. 65 (Vol. II, pp. 104-107), SN 12. 67 (Vol. II, p. 112-115), DN 14 (Vol. II, pp. 30-35).

61) 水野 [1984: pp. 122-123]、中村 [1994: pp. 497-506] を参照。

62) Schmithausen [2000: p. 74] を参照。

る」<sup>63)</sup>、「漏入 (āsava) の出現により、無知 (avijjā) の出現がある。…無知の出現により、漏入の出現がある」<sup>64)</sup>、「寿命 (āyu) は体温 (usmā) に縁って留まる。…体温は寿命に縁って留まる」<sup>65)</sup> などがある。いずれの相互依存関係も認識過程における主体と客体を意図するものではなく、相互依存関係だから識と名色が認識の主体と客体を表すという論理は成り立たない。

### 4.3. 名色と六処の関係

「識→名色→六処→触→受」の縁起関係のうち、「識→名色」<sup>66)</sup>と「六処→触→受」の関係は縁起説以外の資料にも確認できるが、「名色→六処」の関係は縁起説にしか見られない<sup>67)</sup>。また、六処 (saḷāyatana) という語も縁起説を除けば、それ程見られない語である<sup>68)</sup>。すなわち、名色と六処の縁起関係は縁起説特有の因果関係と言える。既に、名色を輪廻の主体と見做し得る縁起説の用例を確認しているため、ここでは、「名色→六処」の縁起関係を認識論的に理解することが妥当なのかを考える。

名色を認識対象と見做す場合、管見の限り、そのような名色に基づいて感官の機能 (六処) が生じることを説く用例は見られない。さらに、名色に限らず、認識対象を原因として感官の機能が生じることを説く用例も確認できない。感官の機能とその対象の関係は、先述した「眼と諸々の形態に縁って、眼による識別作用が生起する」を説く事例のように、並列で説かれるのが普通であり因果関係ではない。それでは、認識対象に基づいて何が生じるのかというと、「私は、六つの〔自己の〕外にある拠り所に縁って、楽、あるいは苦、あるいは苦でもなく楽でもないものを受感する…」<sup>69)</sup>、「形態から生じる (rūpasambhava) 彼の多くの感受は増大する」<sup>70)</sup>、「世間における諸々の物事に (lokadhammehi)

63) SN 22. 51-52 (Vol. III, pp. 51-52), SN 35. 155-158 (Vol. IV, pp. 142-143).

64) MN 9 (Vol. I, pp. 54-55).

65) MN 43 (Vol. I, p. 295).

66) 識と名色の関係については、仲宗根 [2003]、Olalde [2014: pp. 72-104] を参照。

67) 拙稿 (唐井 [2016a]) を参照。

68) 拙稿 (唐井 [2016b]) を参照。

69) MN 146 (Vol. III, p. 274).

触れたとしても…」<sup>71)</sup>、「形態という要素に縁って、形態の表象が生起する。…」<sup>72)</sup>、「この五つの欲望の対象に縁って、楽と喜びが生起する。…」<sup>73)</sup>とあるように、認識対象を原因とするのは感受や接触や表象などであって感官の機能ではない。以上のことを考慮すれば、「名色→六処」の縁起関係を認識対象とそれに基づく感官の機能と見做すことに躊躇せざるを得なくなる。したがって、本稿の立場は既に述べているが、名色を輪廻の主体と見做す方がより妥当な理解だと思われる。

## 5. おわりに

本稿では、触と受の用法を確認し、さらに種々の縁起説について考察した。ここでは、それらをまとめながら考察を加えたい。

触と受の用例を調査した結果、両語が認識過程の要素を担っていることに疑いの余地はない。ただし、六処も含め、輪廻の生存における業の果報を表す場合もあるため、識と名色の理解に関係なく、「六処→触→受」の縁起関係は、認識論的にも輪廻的にも解釈可能ということになる。それを基にいくつかの縁起説を概観したが、認識過程を表す「六処→触→受」の関係は、同じ八支縁起説であっても、説かれる文脈によって意味内容が異なることが分かった。さらに、十支縁起説にある「識→名色→六処→触→受」の縁起関係の解釈について、先行研究には認識論的解釈と輪廻的解釈の両解釈が見られるが、各縁起支の用法から考えれば、両解釈とも成立する。ただし、縁起支間の関係や実際に説かれている縁起説の用例から判断すれば、十支縁起説は輪廻的に理解されていた可能性の方が高いと思われる。

ここまでが本稿の内容である。それに関連して、十二支縁起説を三世に区分し業報輪廻と関連させて理解することについて付言しておく。既に言及したよ

---

70) Th 795, SN 35. 95 (Vol. IV, p. 73).

71) Sn 268.

72) SN 14. 7 (Vol. II, p. 144).

73) MN 66 (Vol. I, p. 454).

うに、三世にわたる縁起説が初期仏典には確認される。しかし、縁起説と業報輪廻の関係となると、ほとんど説かれることはなく<sup>74)</sup>、後に縁起説を業報輪廻の思想に基づいて解釈する素材となるものが、初期仏典から回収できるのかという疑問がある。それに対して、まず考えられるのは、行 (saṅkhāra) と業を同義と見做す場合である。確かに、行と業は cetanā を介して同義であると言えるが、明確に「行=業」を示す用例は見られない<sup>75)</sup>。また、識 (viññāṇa) について、「…業は耕地である。識別作用は種子である。渴望は湿気である。…」<sup>76)</sup> という用例があり、業と識との関係性も窺えるが、因果関係が説かれているわけではない。そのため、本稿で考察したように、行や識などの縁起支よりも、むしろ触と受の方が業と関係していると思われ、それらの用法も業報輪廻の思想に基づく解釈の契機となった可能性がある。いずれにせよ、業報輪廻の思想を用いて十二支縁起説を解釈する要素が、初期仏典には備わっていたと言えるだろう。

【略号表】

AN	<i>Āṅguttara-Nikāya</i> . PTS.
AN-a	<i>Āṅguttaranikāya-Aṭṭhakathā (Manorathapūraṇī)</i> . PTS.
Āy	<i>Āyāraṅga</i> , W. Schubring (ed.), <i>Ācārāṅga-Sūtra: Erster Śrutaskandha: Text, Analyse und Glossar</i> (Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes, XII- 4), Leipzig: Kraus Reprint, 1910.
Dhp	<i>Dhammapada</i> . PTS.
DĀc	佛陀耶舍共竺佛念譯『長阿含經』 T01(No. 1).
DN	<i>Dīgha-Nikāya</i> . PTS.
Isi	<i>Isibhāsiyāiṃ</i> , W. Schubring (ed.), <i>Isibhāsiyāiṃ: Aussprüche der Weisen</i> (Alt- und Neu-Indische Studien, 14), Hamburg: Cram, De Gruyter, 1969.
MN	<i>Majjhima-Nikāya</i> . PTS.

74) Sn 653, Th 422には、縁起と業について説かれているが、十二支縁起説に関するものではない。

75) 村上 [1989: p. 47] は、cetanā という点で行と業が同一であることを認めているが、業が行為そのものを表すことと、行為の後に残存する影響力を表すことの両者については、行が業と同義か明らかではないとする。

76) AN 3. 76 (Vol. I, pp. 223-224). 福田 [1993: pp. 7-10] によると、この資料の内容は、初期仏教の三有説からアビダルマ的な業有説へという解釈の変遷を反映するものである。

- NidSa(Ch/F) *Nidānasamyukta*, J. Chung, T. Fukita (eds.), *A New Edition of the First 25 Sūtras of the Nidānasamyukta* 梵文雜阿含因縁相應（第一～二十五經）山喜房佛書林, 2020.
- PTS Pali Text Society.
- SĀc(1) 求那跋陀羅譯『雜阿含經』 T02(No. 99).
- SN *Samyutta-Nikāya*. PTS.
- Sn *Suttanipāta*. PTS.
- SN-a *Samyuttanikāya-Aṭṭhakathā (Sāratthappakāsinī)*. PTS.
- T 大正新脩大藏經.
- Th *Theragāthā*. PTS.
- Utt *Uttarajjhāyā*, J. Charpentier (ed.), *The Uttarādhyayanāsūtra being the first Mūlasūtra of the Svetāmbara Jains* (Indian repr.), New Delhi: Ajay Book Service, 1980.

【参考文献】

Anālayo

- [2011] *A Comparative Study of the Majjhima-nikāya*, Taipei: Dharma Drum Publishing Corporation.

Aramaki, Noritoshi

- [1985] “On the Formation of a Short Prose Pratītyasamutpāda Sūtra”, *Buddhism and Its Relation to Other Religions: Essays in Honor of Dr. Shozen Kumoi on His Seventieth Birthday*, Kyoto: Heirakuji Shoten, pp. 87–121.

Bobhi, Bhikkhu

- [2000] *The Connected Discourses of the Buddha: A Translation of the Samyutta Nikāya*, Boston: Wisdom Publications.

Bucknell, Roderick S

- [1999] “Conditioned Arising Evolves: Variation and Change in Textual Accounts of the Paṭicca-samuppāda Doctrine”, *Journal of the International Association of Buddhist Studies*, 22(2), pp. 311–342.

Dixit, K. K

- [1978] *Early Jainism* (L. D. Series, 64), Ahmedabad: L. D. Institute of Indology.

Olalde, Liudmila

- [2014] *Zum Begriff ‘nāmarūpa.’ Das Individuum im Pāli-Kanon*, Lumbini: Lumbini International Research Institute.

Olivelle, Patrick

- [1998] *The Early Upaniṣads: Annotated Text and Translation*, New York/Oxford: Oxford University Press.

Reat, N. Ross

- [1987] “Some Fundamental Concepts of Buddhist Psychology”, *Religion*, 17, pp. 15-28.  
Schmithausen, Lambert
- [2000] “Zur zwölfgliedrigen Formel des Entstehens in Abhängigkeit”, *Hōrin*, 7, pp. 41-76.  
赤沼智善
- [1958] 『漢巴四部四阿含互照録』 破塵閣書房。  
唐井隆徳
- [2016a] 「縁起説における認識過程」『佛教大学仏教学会紀要』 21, pp. 147-173.  
[2016b] 「「六処」という用語と縁起説」『佛教論叢』 60, pp. 1-7.  
[2020] 「初期仏典に見られる縁起説の輪廻的解釈について——触・受の用法をめぐって——」『印度学仏教学研究』 69(1), pp.450-455.
- 谷川泰教
- [1980] 「ジャイナ教聖典に見られる Saṃyutta-Nikāya I. 2. 7の平行句」『密教文化』 132, pp. 69-96.
- 仲宗根充修
- [2003] 「初期仏典における十支縁起説の成立——四食説及び識住説との関連から——」『佛教大学大学院紀要』 31, pp. 1-19.
- 中村元
- [1994] 『中村元選集〔決定版〕第16巻 原始仏教の思想 II』 春秋社。
- 名和隆乾
- [2015] 「パーリ聖典における輪廻と識についての一考察——識の *ava-√kram* を中心に——」『印度学仏教学研究』 63(2), pp. 891-895.  
[2018] 「*nāmarūpassa avakkanti-* について」『印度学仏教学研究』 66(2), pp. 918-923.
- 馬場紀寿
- [2003] 「北伝阿含の註釈書要素——縁起関連経典——」『佛教研究』 31, pp. 193-219.
- 福田琢
- [1993] 「『法蘊足論』の十二縁起説」『仏教学セミナー』 57, pp. 1-26.
- 藤田宏達
- [1978] 「原始仏教における因果思想」『仏教思想 3 因果』 平楽寺書店, pp. 83-124.  
[1979] 「原始仏教における業思想」『業思想研究』 平楽寺書店, pp. 99-144.
- 舟橋一哉
- [1972] 「初期佛教の業思想について——相応部の一経典の解釈をめぐって——」『仏教学セミナー』 16, pp. 1-11.  
[1974] 「佛教における業論展開の一側面——原始佛教からアビダルマ佛教へ——」『仏教学セミナー』 20, pp. 45-65.
- 本庄良文
- [2014] 『俱舎論註ウパーイカーの研究 訳註編 上・下』 大蔵出版。

水野弘元

[1984] 「原始仏教における心」『仏教思想 9 心』平楽寺書店, pp. 109-143.

宮本正尊

[1974] 「原始仏教における縁起説の考察」『佛教研究』4, pp. 46-63.

村上真完

[1989] 「諸行考(Ⅲ)——原始仏教の身心観——」『佛教研究』18, pp. 43-70.

山崎守一

[2018] 『古代インド沙門の研究』大蔵出版.